

十五の前に、二十四の裏に當る半枚が残つてゐる。外に一より十六の丁附けを有するものと（その内四、五の兩紙は白紙の儘に残されてある）、丁數不明の裏面だけを残した一枚（寫眞Ⅲ參看）とが一纏めに成つて、體裁上明かに前記二者と同一の本に屬するものがある。大英博物館では、之を001即ち第一冊の一部分として扱つて居ると見え、特別に番號を與へずして其の末に附し、Serindia の Plate CLXIII にも、この中の十五の丁附けのある所を掲げて、第一冊同様に001の番號を附してあるが、此等の二者は明かにそれぞれ別冊の殘卷である。こゝには便宜上、此等の内、一—十六の丁附けのある分を Ch. XIX, 001^a と稱し、丁附け不明の半枚の殘簡を Ch. XIX, 001^b と稱して置く。

三 卷 名

前項に記した四種の殘卷の中、001には其の卷頭に漢字で「阿毗達磨俱舍論實義疏卷第一」と記し、卷尾即ち一百四十九丁の終にも同様の文字が記され、尙此等兩者の直後には、回鶻文で其の翻譯が記されており、其の他上方の小口書にも「疏第一卷」と記されてあるから、此の一冊が所謂實義疏の第一卷なることは疑を容れる餘地はない。002は首尾共に殘缺して居るから、その卷名を直ちに判定しかねるが、幸にも上方の小口書に、半分以上も残つて居る漢字は、明かに「疏第四卷也」と記されたものであることを認め得る。然るに第一卷即ち001の八十六枚表には「上辯異說竟」と記して、之に對する回鶻文の翻譯を施し、其の次に「善哉 莎土」と記し、行を改めて「印於初卷了了也。第二 basladi ymu : :」と見え、また第四卷即ち002の五十二枚目裏には、第三行から第四行にかけ